



大震災から学ぶ (2)



平成7年(1995)1月17日 黒煙をあげ燃え上がる神戸

阪神・淡路大震災〈兵庫県南部地震〉

平成7年(1995)1月17日 午前5時46分発生

震源 - 淡路島北部 震源の深さ 16km マグニチュード **7.3**

(平成13年4月23日 気象庁7.2から7.3と訂正^{ていせい})

阪神・淡路大震災をもたらした、兵庫県南部地震は、活断層が引き起こした直下地震です。揺れは、兵庫県南部の神戸市、芦屋市、西宮市、宝塚市、淡路島などで強く、多くの人々が睡眠中であつた真冬の早朝に発生したため、死因のほとんどが家屋の倒壊などによる圧死でした。特に神戸市の市街地の被害は大きく、多くの火災が同時に発生するとともに鉄道の高架橋や駅、高速道路やビルなどが崩れ落ちました。

また、神戸市の長田区では、古い木造住宅が密集していたため次々と火の手が広がり、これに道路の寸断や消火用水が確保できないことも加わって消火活動は困難を要しました。このことから住民同士による「共助」の重要性がうたわれるようになりました。

被災状況

死者・行方不明：6,437人
(内、行方不明者3人)

住家全壊：104,906戸

住家半壊：144,274戸

建物焼失：7,574戸
(半焼・部分焼等含む)

総務省消防庁 確定報：
平成18年(2006)5月19日

～阪神・淡路大震災～ <兵庫県南部地震>



共助の大切さ～地域で助け合う～

阪神・淡路大震災以降、各地において、災害に強いまちづくりが進められました。例えば建物の耐震化や不燃性の強化、高速道路や鉄道の高架橋の補強などです。また、災害用伝言ダイヤル「171」や緊急地震速報も一般に普及し、水道水や電気、ガスなどのライフラインの復旧も当時に比べ一段と早くなっています。しかし、何より大切なのは「地域の安全は地域で守る」という視点です。

震災後、神戸市を中心に、協働によるまちづくりの気運が高まり、災害時のボランティア活動や自主的な防災活動の重要性が全国に広がっていきました。



平成7年(1995)1月18日
火災でくすぶり続ける神戸市長田区



平成24年(2012)6月10日 神戸市長田区にある阪神・淡路大震災の復興シンボル「鉄人28号」の前で岩手県大船渡市の伝統芸能「鹿踊」を披露する人々



平成10年(1998)12月20日 地域の人々との触れ合い～
神戸市長田区の大国公園でのもちつき

防災トピック

野島断層

野島断層は、兵庫県淡路島の旧・北淡町ほくだんちょう（現・淡路市）の北端にある江崎灯台付近から南方の富島地区（現・淡路市宮島）までの約10kmにわたる活断層[※]です。

これは、兵庫県南部地震の際に活動した断層の一つで、震源に最も近いものです。北淡震災記念公園内にある野島断層保存館には、この断層のうち約140mが展示されています。

※活断層とは、およそ180万年前に繰り返し活動し、今後も活動する可能性がある断層のことである。地震の規模は断層の長さに関係があり、長い断層ほど大きな地震をおこすとされている。



保存されている野島断層



大震災から学ぶ (3)



日本橋より魚河岸及三越呉服店附近延焼 [台東区立下町風俗資料館所蔵]



帝都大震災火災系統地図 [台東区立下町風俗資料館所蔵]



田端駅(北区)の被災者 [東京都震災復興記念館所蔵]



当日大阪で発行された号外 (大阪朝日新聞)

関東大震災〈関東地震〉

大正 12 年(1923)9月 1 日午前 11 時 58 分 32 秒発生

震源 - 神奈川県相模湾北西沖 80km

マグニチュード 7.9

関東大震災の被害は東京や神奈川を中心に南関東一帯に及びました。東京で一番揺れが激しかったのは現在の墨田区や江東区一帯で、家屋の2~3割が壊れたとされています。また、発生時がちょうど昼頃で、火を使っていた家庭が多かったため、多くの家々から出火しました。当日、関東地方には能登半島付近にあった台風の影響で強風が吹いていたため、火はまたたく間に広がり、下町の大半が消失する大火となってしまいました。当時の東京市街地の4割が火災によって被害を受けたとされています。死者・行方不明者約 11 万人のうち 87.1%が火災で亡くなっています。

被災状況

死者・行方不明：105,000人余り

住家全壊：109,000戸余り

住家半壊：102,000戸余り

住家焼失：212,000戸余り

理科年表 平成24年(平成23年11月)

～関東大震災～ 〈関東地震〉



震災の被害

■ 凌雲閣（浅草十二階）の半壊

今の台東区浅草にあった凌雲閣は、明治23年（1890）に建てられた12階建ての赤煉瓦造りの八角形の塔で、「浅草十二階」とも呼ばれました。高層ビルの先駆けであり、日本で初めてエレベーターが設置されたことでも知られています。

凌雲閣は、当時の観光名所として知られ、江戸川乱歩（推理小説家。名探偵明智小五郎と小林少年を団長とする少年探偵団が怪人二十面相と対峙する「少年探偵団シリーズ」が有名）の小説『押絵と旅する男』の舞台にもなっています。

しかし、大正12年（1923）9月1日に発生した関東大震災で、建物の8階以上の部分が崩壊し、その後、爆破により解体されました。



往時の姿をしのばせる錦絵に描かれた凌雲閣
[東京都江戸東京博物館所蔵]



崩壊した浅草凌雲閣 [台東区立下町風俗資料館]



たづね人の貼り紙（東京駅交番前）街のあちこちに、関東大震災で行方不明となった家族・友人を探す貼り紙が貼られました。 [東京都震災復興記念館所蔵]

防災トピック

『あの日この日』

私の家は、母屋も二階の方も共に東へ倒れてみた。私方の上隣りの、長谷川揆一家もつぶれて、数多い植木だけが見えた。道路のつき当たりの宗我神社の拝殿だけがつんのめるように崩れ、うしろの小さい本殿だけ立ってみた。神楽殿もつぶれた。空葉罐をぶらさげた細君の家をふくめて、向う三軒に当る農家もすべてつぶれた。見える家で無事なのは一軒もなかった。

（尾崎一雄『あの日この日』(一)「23 関東大震災、その被害状況(大正12年)」
講談社文庫から)

当時、早稲田大学の学生であった尾崎一雄 [明治32年(1899)―昭和58年(1983) 芥川賞作家] は、夏休みで帰省していた神奈川県小田原市で被災している。後年、その時の被害状況や人々の様子を、随筆『あの日この日』に詳細に記している。



大震災から学ぶ (4)

関東大震災で東京は焼け野原となりました。壊滅的な被害を受けた東京は、どのように復興したのでしょうか。

復興に向けて～行政機関による「公助」～

関東大震災発生の翌日〔大正12年（1923）9月2日〕に内務大臣になった後藤新平ごとうしんぺいは、9月6日に「帝都復興ノ議」を閣議に提出しました。さらに、9月27日には帝都復興院が設置され、その総裁を兼務することとなった彼は、江戸時代以来と言われる東京の復興計画を提案しました。具体的には、道路や公園、橋などの整備と大規模な区画整理の実施です。

財源不足で計画はかなり縮小されましたが、その際に整備されたものには、昭和通りや大正通り（現靖国通り）などの復興道路、復興区画、復興公園、聖橋ひじりばしや永代橋えいたいばしなどの復興橋、耐震耐火構造となった復興小学校などがあります。

なお、関東大震災が起こった9月1日は、昭和35年（1960）に「防災の日」と定められ、この日を含む防災週間には、全国各地で防災訓練が行われるようになりました。

復興道路



復興した九段坂（千代田区）〔東京都震災復興記念館所蔵〕

復興区画



昭和5年（1930）に開催された『帝都復興展覧会』に出品された八重洲橋付近（東京駅前）の模型〔東京都震災復興記念館所蔵〕

復興公園



隅田公園付近（墨田区）〔台東区立下町風俗資料館所蔵〕

復興小学校



東京市黒門尋常小学校（台東区）〔台東区立下町風俗資料館所蔵〕

復興した東京の街並み

約6年半をかけて進められた復興事業によって東京は近代都市へと生まれ変わり、昭和5年（1930）には帝都復興祭が行われました。

震災直後



大正12年（1923）9月 焼け落ちた吾妻橋

浅草

7年後



昭和5年（1930）12月21日 吾妻橋開通式の様子

震災直後



大正12年（1923）9月 焼失した上野駅

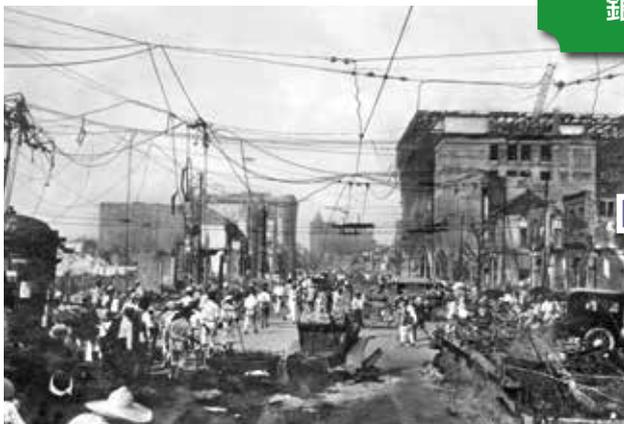
上野

8年後



昭和6年（1931）11月29日 完成間近の上野駅

震災直後



大正12年（1923）9月
焼け落ちた電線がぶら下がる銀座4丁目（中央区）

銀座

10年後



昭和8年（1933）9月 すっかり復興した銀座4丁目



先人が伝える防災の教え

長い歴史を振り返ると、日本人は、多くの自然災害に立ち向かってきたことが分かります。そして、その中で得た知識や教訓を後世の私たちに、数多く残してくれています。私たちもこうした先人の教えを調べ、それにまつわる史跡等を訪れてみましょう。

大地震にまつわるもの

震災避難記念碑

所在地：中央区日本橋浜町
2-57先
(隅田川新大橋北西隅)

関東大震災では火災により各所の橋が焼け落ち、多くの犠牲者を出しました。しかし、新大橋だけは火災からまぬがれ、逃げ惑う人々の生命を救い、避難橋としての大きな役割を果たしました。

そのため、新大橋は多くの人々から「人助け橋」と呼ばれるようになりました。



関東大震災記念塔

所在地：中央区銀座4-1-2
(数寄屋橋交番裏)

関東大震災から10年後の昭和8年(1933)9月1日に「平和の神」を象徴した銅像が建てられました。台座正面には、長くこの日をしのび二度と惨害をくりかえさぬようにと、「不意の地震に不断の用意」と表示されています。



東京都立横網町公園 (東京都慰霊堂・復興記念館)

所在地：墨田区横網2-3-25

関東大震災では、台風の影響もあり大火が発生しました。当時整備中であった現在の横網町公園には火の手を逃れ多くの人々が避難していました。しかし、持ち込まれた家財道具への飛び火や、風速17メートルの強風により、この一帯はたちまち燃え広がり、多くの焼死者が出ました。



東京都慰霊堂

防災トピック

「歴史」に学び、「震災」を後の世に生かす

「今回の震災では、あまりの揺れの大きさから、平安時代の貞観地震※とその後に発生した津波を連想し、すぐに家族全員を日和山※に避難させた人がいます。歴史的事実を見事に生かした事例です。今回の大震災をどのように把握して、次に生かし、いかに未来につなげるか。これが生き残った者の責務であると考えています。」

(石巻市教育委員会 元教育長 阿部和夫氏の講演より)

※貞観地震 貞観11年(869)に発生したマグニチュード8.3の大地震

※日和山 宮城県石巻市の中心部。旧北上川河口に位置する高さ56メートルの丘陵地。石巻市を一望できる。



昭和三陸津波の碑：昭和8年(1933)「地震があつたら津波の用心」石巻市北上地区白浜海水浴場付近に建つ



風水害にまつわるもの

なみよけのひ 波除碑

所在地：江東区木場 6 - 13 - 13 (平久橋のたもと)

寛政3年(1791)9月4日、深川洲崎(ふかがわすざきしゅうらい)一帯に襲来した高潮(たかしお)により、家屋がごとごとく流され多数の死者、行方不明者が出ました。

当時の幕府はこの災害を重く見て、洲崎弁天社から西のあたり一帯の東西285間、南北30余間、総坪数5,467坪(約1万8000㎡)を買い上げて空き地とし、これより海側に人が住むことを禁じ、東北地点(洲崎神社)と西南地点(平久橋のたもと)に波除碑を建てました。



平久橋のたもとの波除碑

大田区立東糀谷 防災公園 「潮位計」

所在地：大田区東糀谷 4-5-1

東糀谷防災公園は避難者を受け入れる防災機能をもった公園です。園内には、東糀谷地区に流れる呑川の防潮堤の高さと、過去に大型台風が来襲した際の潮の高さを表した「潮位計」が設置されています。

※潮位
潮の干満により変化する海面の高さのこと



防災トピック

いな 『稲むらの火』

安政元年(1854)12月24日午後4時、安政南海地震が広村(現在の和歌山県広川町)を襲い、その後、大津波が押し寄せてきました。濱口梧陵は、「逃げる。丘に上がれ。」と必死で村人を避難させるとともに、暗闇の中で逃げ場を失っている村人を助けるため、収穫して積み上げていた「稲むら(稲束を積み重ねたもの)」に火をつけてまわりました。この火を目印に、逃げ遅れた人々は丘に上り、安全に避難することができました。

さらに梧陵は百年後に再来するであろう津波に備え、巨額の私財を投じ、高さ5m、長さ約600mの広村堤防(防波堤)を築きました。安政南海地震から92年後、昭和21年(1946)、南海地震が発生し、高さ4~5mの津波が広村を襲いましたが、広村堤防が村の大部分を守ったのでした。



避難の目印になった
稲むらの火



濱口梧陵
(1820 ~ 1885)



和歌山県有田郡広川町広村堤防
(「稲むらの火の館」 ホームページから作成)

【解説】心変わりした恋人をなじる歌である。

本歌取り（既に詠まれた歌をいろいろな形で取り入れて新たな歌を作る表現方法）による歌で、本歌は、「きみをおきて あだし心をわが持たば末の松山 浪もこえなん（あなたをさしおいて、誰かに私が浮気心をもったなら、決して越えるはずのない末の松山を波も越えるだろう。絶対に心変わりをすることはないから。）」で、もともとは、『古今和歌集』の東歌、すなわち、東国地方の歌謡である。

「末の松山」は、宮城県多賀城付近にある歌枕の地である。貞観十一年（八六九）、三陸沿岸を襲った貞観地震でも、大きな津波は、末の松山を越えなかったことから、「末の松山 波こさじとは」は、「絶対に起こり得ないこと」の例えとして用いられている。

今回の東日本大震災でも、「末の松山」のすぐ近くまで津波が押し寄せたが、ついに、大きな波が「末の松山」を越えることはなかった。



末の松山（提供：宮城県観光課）

※清原元輔

『枕草子』の筆者、清少納言の父。三十六歌仙の一人。祖父の清原深養父、娘の清少納言の歌も『小倉百人一首』に選ばれている。

く。翼なければ空をも飛ぶべからず。龍ならばや雲にも乗らむ。恐れのかなに恐るべかりけるは、只地震なりけり。とこそ覚え侍しか。

【大意】 また、同じ頃であったか、とんでもない大地震が襲ったことがあった。

その様子といったら、尋常ではなかった。山は崩れて河川を埋め、海では津波が押し寄せて陸地を水浸しにした。大地は割れて水が吹き出し、大きな岩は割れて谷間に転げ落ちる。波打ち際を漕ぎ行く船は、波にさらわれ、道行く馬は、足元が定まらない。（略）地面が大きく揺れ、家が壊れる音は、雷鳴とそっくりである。家の中にいれば、たちまち押しつぶされそうになる。外に走って飛び出せば、地面はひび割れてしまう。人は羽がないので、空を飛ぶこともできない。もし竜であったならば、雲にでも飛び乗ろうものを。

この世の中の恐ろしいことの中で、最も恐ろしいのは、やはり地震であると思ったよ。

河をへだてても、しばしもさんぬべし。たゞかなしかりけるは大地振也。鳥にあらざれば、空をもかけりがたく、竜にあらざれば、雲にも又のぼりがたし。白河・六波羅・京中にうちづづまれて、死ぬるもの、いくらといふ数を知らず。

【大意】 旧暦七月九日（新暦八月十三日）の正午頃、大地が非常に強く揺れ動いてしばらく収まらなかった。（略）いろいろなものが崩れ落ちる音は、まるで雷鳴のようで、舞い上がる塵は、煙のようであった。その粉じんて空は真っ暗になり、太陽の光も見えない。老いも若きもただただ驚き、朝廷に仕える人々も庶民も放心している。（略）大地はひび割れ、水が湧き出て、岩がわれて谷に落ちていく。山が崩れて河を埋め、海が漂って浜を浸す。汀を漕ぐ船は波に揺られ、陸を行く馬はどう足を踏んでよいか足場を定めかねた。水が増し洪水となって押し寄せてきたなら、丘に登ったとしてもどうして助かるだろうか。また、猛火が迫ってきたならば、河を隔てているとしても助かるはずもない。全く恐ろしくてたまらないのは大地震である。人は鳥ではないので、空に飛ばたくわけにもいかず、また、竜でもないの、雲にもまた登ることができない。白河、六波羅など、京都中で、一体何人の人が亡くなったのか分からない。



それぞれの記述から、地震に対する作者の思いが述べられている箇所を見つけてみましょう。

鴨長明は、『方丈記』の「大地震」の最後を次のように締めくくっています。「月日かさなり、年経にしのちは、ことばにかけて言ひ出づる人だになし。（年月が経つてくると、このような災害について話題にする人もいなくなってしまう。）」と。

この一節を引用して、地震についてのあなたの考えを二百字程度で書いてみましょう。

古典文学に見る地震



古来、多くの地震に見舞われてきた我が国では、古典文学の中にも、大地震に関わる記述が多く見られます。科学が発達していなかった時代、昔の人々は、今の私たち以上に、天変地異に対して畏怖の念を抱いていたことが分かります。

鎌倉時代、藤原定家が、京都の奥嵯峨の小倉山の山荘で選んだと言われる『小倉百人一首』の中にも、過去の大地震を例えとして用いた歌があります。

『小倉百人一首』

契ちぎりきな かたみに袖そでをしほりつ、
末すゑの松山 波なみこさじとは

清原元輔

【歌意】（二人で固く）約束しましたよね。

お互いに涙を流しながら、末の松山を波が越すことがないように、決して心変わりはいしまいとねえ。



平家一門が壇ノ浦の戦いで滅び、世も鎮まるかに思えた元暦二年（一一八五）、琵琶湖の南部から京都に大災害をもたらした元暦地震が起こりました。鎌倉時代に書かれた『方丈記』や『平家物語』には、この大地震の状況が詳しく記されています。それぞれ、この大地震の様子についてどのように記述しているか、比較してみましょう。

『方丈記』

鴨長明

大地震

又、同じころかよ。をびた、しく大地震振ること侍はべりき。そのさま世の常ならず。山はくづれて河をうづみ、海はかたぶきて陸地をひたせり。土さけて水湧き出で、巖いわわれて谷にまろび入る。なぎさ漕ぐ船は波にたゞよひ、道ゆく馬は足の立ち処をまどわす。（略）地のうごき家のやぶる、音、雷にことならず。家の内に居れば、忽たちまちに拉げなんとす。はしり出づれば、地破れ裂

『平家物語』卷十二「大地震」

七月九日の午刻ばかりに、大地震おび

た、しくうごいて良久ややし。（略）くづる、音はいかづちのごとく、あがる塵は、煙のごとし。天暗てんくらうして、日の光も見えず。老少ともに魂を消し、朝衆悉く心を尽す。（略）大地さけて水わき出で、盤石ばんじゃくわれて谷へまろぶ。山くづれて河をうづみ、海たゞよひて浜をひたす。汀なぎさこぐ船はなみにゆられ、陸ゆく駒は足のたてどを失へり。洪水こうすいみなぎり来らば、岳をかにのぼつても、などかたすからざらむ。猛火みやうくわもえ来らば、